

令和7年度 富山国際大学 外部評価委員会 議事録

I 日 時 令和8(2026)年2月19日(木) 17:30～19:00

II 形 式 オンライン形式

III 出席委員 中島委員、山本委員、濱名委員、江本委員、田村委員 計5名
(欠席：大橋委員、蒲地委員、清水委員)

学内参加者 高木学長、佐藤(悦)現代社会学部長・国際交流センター長、三原子ども育成学部長、湯上谷運営管理部長・事務部長、村上戦略企画部長・地域交流センター長、高橋総合学務センター長、助重入試センター長、佐藤キャリア支援センター長、新森情報センター長、伊藤広報センター長、河崎健康管理センター長、酒井入試担当課長、石黒学生支援担当課長、上滝総務課長[司会] 計14名

1. 開式

2. (学長 高木)

本日は大変お忙しい中、富山国際大学外部評価委員会にご出席いただき、誠にありがとうございます。皆様よくご存じのように、現在、大学は少子化や物価などの物価高などの影響で、大変厳しい状況にございます。とりわけ地方の私立大学はより厳しい状況でございまして、これから先、生き残っていけるのか、持続可能性を持てるのか、というような大変難しい局面を迎えています。本日の外部評価委員会は、今後の大学の在り方について皆様からご意見を頂戴できる大変貴重な機会でございます。いただいたご意見を大学運営に反映していきたいと思っておりますので、本日何卒よろしくお願いいたします。

3. 委員紹介(一覽資料にて)

4. 議事(総務課長 上滝)

次に委員長の選出に移らせていただきます。富山国際大学外部評価委員会規定第五条第二項に基づき、委員長は委員の互選により選任することとなっておりますが、委員のうち3名の方が欠席されており、また新しくお二方が委員にご就任いただいていることもあり、差し支えなければ事務局から委員長候補を推薦させていただきたいと存じます。よろしいでしょうか。

それでは、富山県立大学理事副学長の要職を務めておられ、高等教育現場においてもお高い見識をお持ちの中島委員を委員長に推薦させていただきたいと思っております。皆様よろしいでしょうか。ありがとうございます。それでは以降の進行を中島委員長にお願いしたいと存じます。中島先生よろしくお願い申し上げます。

(進行：中島委員長)

それでは、早速審議に入りたいと思っております。議事に従いまして、まずは令和7年度の現状報告として各学部の概況についてご説明いただきます。順にお願いいたします。

(現代社会学部長 佐藤)

資料に基づき、以下について紹介があった。

(1) 大学の基本理念と学部教育目標

基本理念：「共存共生の精神」と「知性を磨く教育」を基本に、国際社会・地域社会へ寄与すること。

現代社会学部の目標：国際化、情報化、少子高齢化、環境共生に対応できる人材の育成。

実績：1990年の開学以来、約6,500名の卒業生を輩出し、多くが富山県内で活躍。

(2) 学生数・教員構成と留学生状況

学生数：合計417名（1年次～4年次）。近年はやや定員割れの傾向。

教職員：専任教員19名、非常勤講師約25名でカリキュラムを運用。

留学生：計11名（3年次編入、1年次入学、交換留学生を含む）。

(3) 現代社会学部における4つの専攻

観光専攻：観光業界の人材育成。フィールドワークやボランティア等の現場学習を重視。

環境デザイン専攻：住環境、資源エネルギー、バイオマスなど地域の未来づくりを学習。

経営情報専攻：ITの知識・スキル習得。ドローン撮影や行政と連携したプロジェクト（ふくフリ）の実施。

英語国際キャリア専攻：グローバル人材の育成。海外留学が必修で、帰国後も国際交流活動を継続。

(4) 国際化への対応と留学制度

海外連携：11カ国21校と協定。留学奨励金制度により、カナダなどへの海外留学を促進。

国内留学：他大学の協定校で半年～1年間学べる制度の運用。

語学支援：学内でのTOEIC対策講座の実施。

(5) 情報教育とデータサイエンス

認定プログラム：「数理・データサイエンス・AI教育プログラム」のリテラシー・応用基礎レベルに認定。

資格取得支援：ITパスポートや基本情報技術者試験を目指す「情報スペシャリスト養成プログラム」の設置。

(6) 地域連携活動と部活動

地域プロジェクト：空き家リノベーション、五箇山調査、日本酒造りなど、地域での学びを推奨。

地域づくり実習：1年次の必修科目。南砺市での調査・発表会などを実施。

部活動：全国レベルのボート部や、北陸リーグで活動する硬式野球部など。

(7) 就職実績とキャリア支援

就職率：99%（2025年3月実績）。県内就職率は75.5%と高く、地域に貢献。

主な就職先：公務員、地銀（北陸銀行等）、製造、IT、観光（JR西日本、アパホテル等）。

支援体制：1年次から3年次までキャリアに関する授業を必修化し、手厚くサポート。

(8) 高大連携の取り組み

交流実績：2025年度、富山雄山高校の生徒と本学学生による交流会を実施。

(中島委員長)

ありがとうございました。次は子ども育成学部の状況についてご説明いただきます。先生よろしくお願ひします。

(子ども育成学部長 三原)

資料に基づいて、以下について紹介があった。

(1) 学部の基本理念と体制

教育の柱：教育保育、社会福祉に関する「人を育てる人」の育成。

手厚いサポート：教員1名に対して学生5名という少人数のゼミ構成（個別最適化の推進）。

学生の動向：近年は男子学生が増加傾向。高いニーズがある一方、今後の人口減少を見据えた質の向上に注力。

（２）免許・資格取得と実践的な学び

取得可能な資格：小学校・幼稚園教諭、保育士、社会福祉士など。

学習システム：講義・演習で基礎を固め、実習を通して適性を見極めながら進路を選択。

実習の充実：３年次の教育実習や、即戦力を養う社会福祉実習・演習の実施。

（３）国際化・情報化への対応

国際交流：台湾やマレーシアの学生との交流活動、海外留学・研修プログラムの提供。

ICTの活用：教育現場で使われる端末を用いた実践、デジタル資料への書き込みなど多様な学び方の習得。

現代的課題：プログラミング、防災教育、特別支援教育など、新しい教育内容への対応。

（４）地域連携とボランティア活動

学校支援：小学校でのボランティアや、プログラミングクラブのサポート活動。

自主的活動：学生主体の「こども食堂」の運営、ファミリーパークでの自然体験活動。

地域貢献：地域社会の多方面で学生が活躍し、コミュニケーション能力を醸成。

（５）就職状況とキャリア支援

多彩な進路：小学校教員（昨年度 38 名）、幼稚園・保育所、社会福祉分野に加え、民間企業への就職が増加中。

試験対策：３年次から可能になった教員採用試験に対し、少人数制を生かしたきめ細かな個別指導を実施。

社会福祉士実績：国家試験合格率 100%（全国 1 位）。北陸の私立大学では 13 年連続 1 位を維持。

（６）高大連携・卒業後のサポート

高大連携：付属高校との部活動（吹奏楽、野球、陸上など）での共同開催・協力。

現職研修：「エデュシア」を通じ、卒業後の現職教員に対する研修機会も提供。

ネットワーク：学生間の横・縦・斜めのつながり、および大学と現場との連携を重視。

（７）情報発信と結び

メディア活用：学内放送 YouTube チャンネル「チャイバラ」や Instagram での情報発信。

学生一人一人が主役となり、個々の特性と底力を生かして成長できる環境づくりを継続。

（中島委員長）

ありがとうございました。２人の先生ありがとうございました。

次に、教育の質保証に関する報告ということで、学習成果の可視化についてと文部科学省の支援をいただいている少子化時代を支える新たな私立大学等の経営改革支援ということでお話をいただきます。よろしくお願いします。

（総合学部センター長 高橋）

資料に基づき、以下について紹介があった。

（１）基本方針とディプロマ・ポリシー

目的：学生一人一人が、卒業までに定められた資質・能力をどの程度身につけたかを把握・可視化すること。

共通指標：両学部共通のディプロマ・ポリシーとして「人間性の向上」「専門性の向上」「社会性の向上」を掲げる。

(2) システムを活用した可視化と修学指導

活用ツール：Web Class (LMS) および Campus Plan・学生カルテシステム。

個別支援：教育職員が学生の修学状況を把握し、定期的な面談を通じて4年間の継続的な指導を実施。

生活面への配慮：面談で得られた生活面の課題等も学生カルテに記録し、大学全体で成長を支援。

(3) 多角的な評価・分析のプロセス

教員による評価：学期末試験等の成績評価に基づき、授業科目と連動したディプロマ・ポリシー達成度を算出。

学生による自己評価：授業評価アンケート、能力特性評価テスト、自己評価シート（年2回）の実施。

フィードバック：客観的数値と自己評価の結果を教員との面談ですり合わせ、今後の学習目標を確認。

(4) 具体的な可視化の仕組み

達成度のグラフ化：成績と科目の配分比率を積算し、学年ごとに積み上がった成果を可視化。

特性評価：アンケート結果から「5項目の能力」をグラフ化し、学生がいつでも確認可能に。

面談記録の共有：面談結果をシステムに記録し、学生・教員双方がいつでも振り返ることができる体制。

(5) 今後の展望と課題

多面的な支援：授業時間外の活動（課外活動等）も成長の記録として残す仕組みづくり。

データの高度利用：アンケートデータと成績評価の複合的な解析を実施。

全体支援の強化：解析結果を活かし、学生の多面的な成長を大学全体でバックアップする体制を推進。

(中島委員長)

高橋先生ありがとうございました。学習成果の可視化についてご説明いただきました。次は文科省からの支援のメニュー1「少子化時代をキラリと光る教育力で乗り越える、私立大学等戦略的経営改革支援」の説明を村上部長からお願いします。

(戦略企画部長 村上)

資料に基づいて、以下について紹介があった。

(1) 事業の概要と選定状況

プロジェクト名：「TUINS ホタルイカプロジェクト」

テーマ：多様な社会・学生に対応した課題解決型教育（PBL）への転換と地域人材育成。

選定実績：文部科学省「メニュー1」採択。北陸ブロックで3校、富山県内の大学では唯一の選定校。

(2) 教育改革と運営体制の刷新

現代社会学部：専攻融合型プログラムの構築。

子ども育成学部：分野別コース制の導入による、柔軟で魅力ある教育課程への転換。

運営面：富山県との包括連携協定を軸に、5カ年計画で地域社会への貢献と学生募集の強化を推進。

(3) 年度別ロードマップとIT教育の強化

令和6年度（実績）：寄付受付窓口の設置、富山県との包括連携協定の締結。

令和7年度（進行中）：ITパスポート取得連動などの情報教育の充実、県内高校との高大連携の推進。

広報戦略：ニーズ調査の実施、SNSや学内YouTubeチャンネル等を活用した県外向けPRの強化。

(4) 財務基盤の安定化と寄付金の確保

経営目標：支出抑制による黒字維持に加え、入学者数確保による納付金増収を目指す。

税額控除の取得：令和9年の「税額控除対象法人」認定を目指し、同窓生や企業からの安定的な寄付獲得を推進。

(5) 地域社会・行政との連携深化

富山県との連携：行政のオープンデータ活用やDX推進に関する連携。県庁職員による講話や学生の成果発表を実施。

高大連携の具体例：八尾高校福祉コースとの2年間にわたる連携プロジェクト。地域法人とも協力し、実践的な学びの場を創出。

(6) 職場環境の整備と組織改革

柔軟な働き方：育児・介護等に対応した「時間差勤務制度」や「教員裁量労働制」の導入検討。

効率化：組織の簡素化とシステム化を進め、プロジェクトを円滑に遂行できる基盤を構築。

(中島委員長)

先生方、ありがとうございました。それでは質疑応答、意見交換の時間に移させていただきます。最初に濱名先生いかがでしょう。

(濱名委員)

貴学とは長年にわたり協定を結び、国内留学でもお世話になっており、特にエッセンシャルワーカーの養成では、全国的にも一つのモデル校という評価を受けているというふうに、私自身も評価させていただいています。ところが今回非常に気になったのは、評価のところが以前から色々申し上げてきたのですが、この度文部科学省の全国学生調査の結果が公表され、33項目の各項目の上位15%の上位の学校名を公表しました。残念ながら富山国際大学は出てこないのです。このような良い教育をされているにもかかわらず、どうして全国学生調査のポジティブリストに出てこないのかというのはちょっと評価のあり方を見直さないといけないのではないかと思います。

全国学生調査の内容は、成長実感と経験の度合いです。ところが、富山国際大学の評価は自己効力感がどれだけ上がったということは聞いているのですが、その手前の色々な経験を実際にしているということと結び付けて外化させるという評価を十分されていないところが非常に気になります。文部科学省は、今後、認証評価が最低の質保証で、質向上のためには分野別のこうした全国学生調査を次年度はおそらく全大学に義務付けるだろうと私は予想しています。早急に学生の評価プランについては見直しをする必要があるのではないかとというのが一点です。

もう一点は、経営改革支援については、メニュー2は今年私どもと富山国際大学はともに現在公募に応募している状況でございます。本日気になりましたのは、県外から学生を獲得する、ではターゲットはどこにするのか、具体的なアクションプランをどうするのか、それと留学生獲得もメニューの計画の中にあるのですが、これもかなりターゲットを明確にしてアプローチをかけていかないと難しいと思います。そのあたりについて、また改めて機会があれば聞かせていただきたい。アクションプランを立てないと、数値目標を立てても今、各大学とのそのあたり非常に競争厳しいので、ぜひ機会があれば聞かせていただければと思います。以上でございます。

(中島委員長)

はい、濱名先生ありがとうございました。濱名先生のお時間がとれないかもしれませんが、何か大学側からご意見があればお願いします。

(現代社会学部長 佐藤)

本学の留学獲得戦略みたいなところについては、一つ目は、中国との協定校が非常に多いのですが、2+2、ダブルディグリー制度を活用して留学生を呼び込みたいと思っています。

本学の弱みは、留学生寮がなく、たくさん留学生を受け入れたいのですけれども、どのように生活面をサポートしていくかという課題も同時に解決していかないといけないかなというふうに思っています。

その他ベトナムなど、中国だけでなく東南アジア等にも少し拡大したいというふうに考えています。

(濱名委員)

ありがとうございます。

(戦略企画部長 村上)

県外の学生については、今現在、隣接県をターゲットに、比較的しっかりと絞ってやりたいと考えております。

また、エッセンシャルワーカーということで、特に社会福祉士といったソーシャルワーカーは確かに全国一位を取っておるわけですが、実績をどうしっかりと見せるかというところ、そのようなところもアピールする、PR できる、そういう指標、あるいは評価を考えていきたいというふうに考えております。

(濱名委員)

ありがとうございます。

(学務課長 石黒)

全国学生調査に関しては、今年度から本学でも参加しています。どういう結果が出るかわかりませんが、一応学生の方には実施しているということです。

(濱名委員)

調査に則する形での自分たちの評価実感を積み立てさせてないで、いきなり学生調査に答えても、学生たちはその自分たちの成長実感とつながらない。多分その質問紙には突然結び付けて答えられないです。関西国際大学が上位に出てくるのは、そういう形で経験を何度も可視化させているからです。そういう点では少し評価のあり方については、また時間があればご相談に乗りますが、見直された方がいいということです。時間がないので、もうリプライも結構です。

(中島委員長)

濱名先生ありがとうございました。またよろしくお願いします。

それでは他の委員の方お願いいたします。山本委員お願いします。

(山本委員)

私は、県庁の仕事の中で学生さんの就活支援ですとか、県庁自身の職員の採用とかにもお仕事で関わったことがあります。その時の実感として、学生さんたちは、周囲の大人の言っていることとかの影響をすごく受けていると感じることが多かったです。我々が生きてきた時代と、これからこの学生さん

たちが生きていく社会っていうのが、もう全然違っているということです。このことについてキャリア支援の中で、この人口減少に適用していかななくてはならない、こういう時代をどうやって生き抜くとか、そういう時にどういう社会課題があって、どういうふうに自分のキャリアを考えていくかなどをどのようにキャリア教育支援でなさっているのか、聞いてみたかったっていうのが一つであります。

それからエッセンシャルワーカーを輩出していただいているということで、富山県にとっても大変ありがたい教育をしていただいているところではあるのですが、これからはさらに、アドバンストエッセンシャルワーカーっていうような人、最近出てきた言葉なのかもしれませんが定義が定まっていないのかもしれないですけども、もう一歩進んだ形のエッセンシャルワーカーっていう人を育成していただきたいっていうのが、富山県としても力を入れていきたいというふうに今思いを持っておりますので、そのあたり、どのようにお考えかというのを聞いてみたかったです。

大学の経営の話ですが、学生さんの数っていうのは、もう県内からかなり学生さんが入学されていると考えると、県内の高校卒業生っていうのはどんどんこれから減少していくという先が見えていて、県外からと言っても、やはりどこの県も同じような状態なのかなと思っております。

学生さんを確保するというのは非常に難しい中で、例えば社会人とか、そういう人たちのリスキリングとか、学び直しとかそういうようなことで受け入れられるっていうお考えはないのか。

特に IT 教育に非常に強みを持ってらっしゃるとすると、今の学生さんたちはプログラミングの教育とかも受けてきていますけれども、今の社会人の多くの人たちは、そういう教育を受けないで今働いているっていう人もいると思うので、そのあたりとかで何か収入を得るためにも、ということでお考えはあるのかなと思う。そのことを思いながら聞いておりました。以上です。

(中島委員長)

三つご質問がありました。キャリア支援について、アドバンストエッセンシャルワーカーの育成について、それからリスキリングを含む社会人の教育と大学の学生さんの覚悟についてということです。大学側から回答をお願いします。

(キャリア支援センター長 佐藤)

まず一点目のキャリア支援につきましては、キャリア支援のやり方も、時代とともに大きく変化しております、以前でしたら、ちょっとした就活対策というものが中心だったかと思いますが、今、本学では1年生から、本学の特徴として単なるガイダンスではなく、必修で、1年生でまず自己分析をする。そしてそこで具体的に将来の設計図を立てるような機会を与えています。2年生で主に県内就職が多いので、県内の産業や企業について学び、そして実践的な就活対策的なことは3年生でもできるようになっております。そしてこのようなカリキュラムと同時に、その種類の変化、それから実践的な課題対応力をつけるという意味で、現場に出て行って、企業の方、自治体の方と一緒に実習をするということに非常に力を入れております。経験を通してかなり学生の社会に対する理解、それから自己理解を頑張っているというふうに感じております。以上です。

(山本委員)

ありがとうございます。

(中島委員長)

二点目について。

(子ども育成学部長 三原)

一歩進んだエッセンシャルワーカーの育成ということですが、大きく二点と考えています。一つ目は、やはり ICT。今、色々な業務の効率化であるとか、新しいネットワークの構築であるとか、そのようなことについては、教育、保育、社会福祉のところでも大いに取り入れていかなければならない。人材が足りないというこの現状では、そのようなところが必要になるということなので、もちろん生成 AI の活用であるとかも大いに取り入れていく必要があるという風に考えています。

二点目は、エッセンシャルワーカーとして大切なことは、やはり人を相手にするということだと思います。人を相手にするということは何が必要なのか、コミュニケーションをよく取るであるとか、相手の気持ちを考えると、要するに人相手を大切にすることができるか。そのような人としての資質能力というのは、今後にも必要になる。さらにそのような子どもたちを如何に育てていくかということも考えていかなければならない。これは昔から言われていることですが、そのような基本的なところ、基礎的なところ、社会生活を営む上で人間関係をどう構築していくかということ、やはりもう一度掘り下げて学生たちにしっかり考えさせていく機会を増やしていくということが必要だと考えています。以上です。

(中島委員長)

はい、ありがとうございます。三つ目のリスクリング等についてはいかがでしょう。

(情報センター長 新森)

現代社会学部情報系の教員の新森と申します。リスクリングに関しては、私の「人工知能とその活用」という授業で市民聴講生の方を受け入れておりまして、後期 2 人だけですが、参加してずっと授業を取っていただきました。収入面での貢献という意味では、受講料 8,000 円ですので、特に経営面に貢献はありません。とはいえ、実際にやはり社会で、かなりの経験を積まれた方が、特に今生成 AI をどうやって使うのか、どういう仕組みで動いているのかということに興味や関心をお持ちです。この授業はまさに深層学習とか生成 AI の基本的な原理を学んでいただくという授業ですので、今後もこういう社会人の方をぜひ受け入れたいと考えております。

(中島委員長)

はい、ありがとうございます。山本委員いかがでしょうか。

(山本委員)

どうもありがとうございました。ご丁寧な説明ありがとうございます。

(中島委員長)

はいでは、それでは。次に江本委員いかがでしょうか。

(江本委員)

私は質問とかではないのですが、私たち保育士会がお世話になっています。子ども育成学部の先生方には、本当に研修等で幼児教育の動向や現場で起きていることを教えていただいています。保育士会会員の中には、卒業生の方も多くいらっしゃいます。また、職場では貴大学の卒業生さんとともに子どもの発達を喜び、関わり方について話し合いながら保育を語り合っています。富山県の幼児教育の質をさ

らに高めるために、また、より時代に合った幼児教育を牽引していただくためにも貴大学はなくてはならない存在だと日々感じております。質の高い教育をもっともっと県外にもアピールしていただいて、是非ともよりたくさんの学生さんを受けていただいて、優秀な幼稚園教諭、保育士さんを私どもの元へ送り出していただきたいなと思っております。あの質問ではないですが、私からはそれだけです。よろしくお願いします。

(中島委員長)

はい、ありがとうございます。江本委員、何かご要望とかなくていいですか？

(江本委員)

海外のお父さん、お母さんをお持ちのお子さんも増えてきましたので、国際大学ですので、語学のことも得意ではないかなと思うので、卒業生の活躍を期待したいと思います。

(子ども育成学部長 三原)

ありがとうございます。これからの学生に期待していただくお話をいただき大変ありがたいと思っております。

確かに今のお話のように外国にルーツのある子どもたちがものすごく増えてきております。もちろん幼児教育、学校教育ともにでございます。特に限定すると射水市、それから高岡市の一部、さらに富山市などでは、特に日本語外国語支援というのが必要になってきておりまして、大学の方でも、そのような学校、地域に対して学生と一緒に日本語指導に行っているというプロジェクトも今行われております。そのようなことをしながら学生の資質を高めるということもありますが、今は語学と言いましても、スマホがあるといろんなコミュニケーションが取れたりします。それから日本の文化や習慣をいかに子ども、幼児、そして児童生徒などに日本の文化を教えていくか、身につけさせるか、生活習慣を身につけさせるかっていうところも、ものすごく今現場では問題になっております。ただ、それについては、個々の対応が必要ですので、大まかにこれだということが今なかなか言えない時代でございます。個別に応じた指導っていうのを今後どう行っていくかということをこれから研究で進めながら、学生と一緒に実践力を高めていきたいというふうに考えておりますので、こういったことのニーズとか、必要がありましたらお話しいただければありがたいです。よろしくお願いいたします。

(江本委員)

よろしくお願いいたします。

(中島委員長)

それでは、卒業生としての立場からも、田村委員お願いします。

(田村委員)

ありがとうございます。今回、今ほどご紹介いただいたように OB の一人としても聞かせていただいて、母校の活躍というのに触れて大変うれしく、また活動の方もよく理解できました。ただ、やはり生徒数が減少しているというのは、どちらも 4 年生から 1 年生まで見ますと、同じような形ですので、少子化の中ですが、しょうがない部分もあるのかもしれませんが、ちょっと残念に感じております。

発表の中で高大連携というのであったのですが、雄山高校の事例のお話がありました、やはりこういったところを県内の他の高校でも、もっとできれば早めに複数のところで増やしていけないかと、多分してらっしゃると思いますけど、そこら辺をどのようにしてらっしゃるのかなという点が一点。

そして県外の学生の獲得というお話もありまして、本当にそうだなと思います。私も、たまたまちょうど大学に進学した子供と、今高校生がいるのですが、やはり選択ってなった時には、いろんな学校を見ましようというふうに、高校からも言われました。そうすると県内はもちろんですが、学校数だけでいうと、当然県外の方がたくさんあるので、どうしてもそのようなところを見て県外に行くのは多いのではないかなと思います。

先ほど新幹線が走ってから、富山は関東・東京方面に高校生が進学で大学に行くと。石川は、だいたい大阪方面と結構半々。福井は、今もどちらかというところと関西が近いので、関西進学。あと、データで出していたのが、やはり石川と富山の方は、意外にこの両県は地元というところと結構両県のことをだいたい地元というふうに認識している。福井の子は、福井県だけがどちらかというところと地元という意識。例えば、そういう観点で言えば、石川の学生にいわゆる PR を強めにすれば、富山はすぐ近いし行こうかなとか、あとは新幹線も延伸してちょうど福井に行き、一年ほど経ちますので、県外の学生の獲得に対しては、どのような活動、またお考えなのかなというところも教えていただけたら嬉しいかなと思います。

あと、先ほど子ども育成学部の小学校の先生、非常に活躍してらっしゃるという話を聞きまして、私も地元の中学校の PTA の会長をつい最近までしていました。今もちょっと中学校お邪魔しているのですが、やはり国際大学卒業生の小学校の先生が非常に増えてきて、非常に活躍いただいているという話を聞いています。中学校、小学校、いろんなところでそういう話を聞きますと、逆にそのような活躍している方がどんどん増えてニーズがあるのであれば、そのようなところの学部の強化だったり、人数確保というのをより充実させれば、非常に県民にとっても嬉しいですし、学校さんにとっても、プラスになるのかなというふうに感じたりしています。

最後に、寄付金のお話ですが、つい先日、大学の企業講演会でも、寄付金の案内ありましたので、色々なところで周知してらっしゃるなというふうにうれしく拝見しておりました。寄付金というところ、どうしてもお金を出してくださいというふうに感じる部分もあるのですが、結構他の大学さんは、特に学生の保護者にはもう年に何度も何度も依頼が来ています。私も上の子が初めて大学1年になったら、こんなに寄付金の依頼が来るかと思うくらいにたくさん来ていますので、ぜひ国際大学も遠慮せずにこういった制度を作ってやっていますよということを周知されると良いと思います。今後の展開をどのように考えてらっしゃるかというところを教えていただければ、大変うれしく思います。以上です。

(中島委員長)

ありがとうございます。それでは順番にまず高大連携、地域との関わりという意味で。これいかがでしょうか。

(入試センター長 助重)

高大連携について、先ほどの立山町の連携というのは、二年間実施をしております。これは実は立山町さんの中でやはり近所の大学と連携したい、立山町にある雄山高校の方と連携事業での交流会を開いてほしいということで、立山町さんが主催という形になっております。こちらから自治体に言ってもなかなか他の自治体は動いてくたさらないような状況です。業者の説明会とか学校見学というのは最近非常に増えておりまして、模擬授業など実施しています。そのようなものについては、授業の先生方がお忙しくてなかなか時間が合わないのですが、できる限り、行ってもらうというようなことをして

います。今までだと、もう授業と全部重なっていたらお断りするというようなことでしたが、できる限り、大学の方の授業に支障がない限り、できるだけ行ってもらって、高校生との接触の機会というのを可能な限り増やしております。あと、付属高校とのつながりが弱いということもあり、今まさに強化しているところです。以上です。

（戦略企画部長 村上）

私の方から高大連携のことについて少し補足させていただきます。先ほど八尾高校さんとの高大連携の事業が二年計画で行っているというお話をいたしました。これは富山市からの業務委託を受けた一環ですが、今後富山いずみ高校の総合学科のようなところと探求の時間等を活用して、さらに高大連携を進めていく流れも計画の中に持っており、進めていきたいと考えているところでございます。

（中島委員長）

はい、ありがとうございます。他に寄付金の件はいかがでしょうか。

（戦略企画部長 村上）

戦略企画部といたしましては、先ほどのきらり補助金の一環として、それこそ1円でも、10,000円でも多く皆さんから、もちろん募る以上はそれに対してどういったメリットがあるか、あるいはどういったことを社会に還元できるかということをうまくこれからアピールできるようにしていかなないと、それこそ集まるものも集まりませんし、しっかりとそこには我々の計画や思いや、あるいは学生さんたちにとって何よりも魅力のあるプログラムを、この補助金の過程の中で、専攻の融合化、あるいは分野別のコース制、そこにアドバンストエッセンシャルワーカーの要請、そのようなことが、善の循環のよううまく回っていけば、そこにお金もついてくる。あるいはさまざまな社会貢献が高まれば、そこに知名度も上がり、学生も入りと、そんな好循環をまさに考えていきたいというふうに思っております。

また、卒業生の皆様方、同窓生の皆様方との連携強化なくしてはいけないと思っておりますので、母校愛をしっかりと育んでいけるように、またアピールしていきたいと思っております。よろしくお願いいたします。

（中島委員長）

最後に中島が質問させていただきます。キャンパスが二つに分かれていて、子ども育成学部は呉羽にあります。この場合、大学全体の活動としては語学学習とか、留学生の獲得とかあったときに、その両方のキャンパスそれぞれがやっているものをどうやって大学全体として共通化する、あるいは逆に尖らせるのか必要となることもあると思うのです。二つのキャンパスをうまく使う戦略はどうされているか、教えていただけますか。本学もキャンパスが二つ、離れていて交流がなかなか難しいところがあるので教えていただければありがたいです。いかがでしょうか。

（現代社会学部長 佐藤）

先ず授業に関しては、少なくとも両学部で同じような内容の授業、例えば経済学とか哲学とかですね。そういう部分に関しては、オンライン授業を通して、一つの授業を両学部で聞けるような形で実施しております。

離れていて学生同士の交流っていうのが一番大きな問題になっております。やはり、二つの学部しかないなので、どうしても交流したいという希望がありますので、なんとか大学側としてもいろいろな仕組みを考えながら、両学部の交流というものをぜひ新たな形で作っていきたいと思っています。

(中島委員長)

教養もオンラインで行われているという理解で良いのですか？

(現代社会学部長 佐藤)

すべての科目ではありませんけれども、両学部のカリキュラムにある同じような科目に関しては、オンラインで行っています。

(中島委員長)

新森教授や高木学長は、その分野の本当に最先端の方なので、いろいろ教えていただけるとありがたいなと思っています。うちの学部でも、オンラインだと先生も学生の習得状況が分からないというのもあって、対面で講義を行なっています。オンラインの良さをどうやって引き出すのかを、また教えていただければありがたいと思っています。

(情報センター長 新森)

難しい質問です。一つ申し上げたいのは、学習評価・教育開発協議会の連携開設科目というのを、先ほど申した「人工知能とその活用」でやっております。社会人を受け入れるだけでなく、連携校、今期は札幌国際大学、前橋国際大学の学生さん 6 人が履修登録してくれて、ずっと聞いてくれていました。問題は評価をどうするかですけども、評価はフォームで時間制限を付けて実施するという形でやりました。学生同士の交流はできないですけども、質問とかはチャットで書き込まれたものを共有するという形で行いました。

(中島委員長)

ありがとうございます。最後にもう一つ。高校との連携とか、短大との連携は何かありますか。「みどり野」幼稚園があって、幼児教育に力を入れていることはわかるのですが、その他、学園内で連携はされていますか。

(子ども育成学部長 三原)

短大との関係ですが、幼児教育学科がありますので、より専門的なところ、こういう幼児教育に関してより専門的なところを学びたいという学生については、短大から大学の方に編入してくるシステムがございます。そのようなところで学生の資質を上げるということは取り組んでおります。

それから実習としては、「みどりの幼稚園」もあるのですが、「西田地方保育園」とか、子ども園とかも活用しながら、実習をしている。実習と言いましても、その実習期間だけではなくて、例えば芸術的なところを交流する会であるとか、保護者と交えた行事とか、そのようなところにも学生が参加しながら、サポートしながら、ワークショップをしたりして、色々な学びをしているという繋がりががあります。

それから付属高校との繋がりについてですが、こちらの方は、例えば野球部。先ほど二つのキャンパスがあって学生が交流しにくいというお話もありましたが、部活動に関しても実はそのことが言えます。

練習するとなるとどうしても東黒牧キャンパスの方で練習するということは多くなるのですが、例えば、呉羽で野球部の部員は、高校の野球部と一緒に練習をする交流も始まっています。

それから吹奏楽部も演奏会とか、まだ始まったばかりですけども、合同でしたり、その縦のつながりでもう少し交流が進めばいいかなと思っております。今、活性化されている、始まったところでございます。以上です。

(中島委員長)

ありがとうございます。ぜひ、高校・大学と一緒に運営していますので、うまく連携できると良いなと思って質問させていただきました。他に何かございましたら最後をお願いします。いかがでしょうか。大学の方から、何かお知らせしたいことがあればお願いしますが、いかがでしょうか。

(戦略企画部長 村上)

今ほどの学园内ということにつきまして、戦略企画部といたしましては、学長裁量経費というものを設けておりまして、学园内での教員間でのプロジェクト、研究を広く募集し、その中で良いものを採択していくといったようなこと実施しております。

短大の同じ分野、あるいは違う異分野の先生方との共同研究を始め、色々な形で交流を深めながら、また新たな価値を創出するということにつながるような、そんなプロジェクトなんかも戦略企画部としては募集をしておるということも、付け加えさせていただきたいと思っております。以上です。

(中島委員長)

ありがとうございます。他に何かご意見ございますか？ないようであれば、質疑応答とかご質問を終わりにさせていただきます。

お聞きした中で、やはり文部科学省からいただいているお金での課題解決といったようなこと。例えば定員充足とか、いろいろ課題はあるというふうには思います。外部評価委員会としては、この課題解決に向けて適切に運営をされており、改善に向けて取り組まれていると、認めたいと思いますが、委員の先生方、ご異論ございますか。よろしいでしょうか。

ご意見がないようでしたら議事を終了させていただいて、本部の方にマイクを戻させていただきます。よろしく申し上げます。

(総務課長 上滝)

はい、中島先生、誠にありがとうございました。また、委員の先生方におかれましては、大変お忙しいところ本学の外部評価ということでお時間いただきまして誠にありがとうございました。今回貴重なご意見賜りましたので、またそれを改善につなげていきたいと思っております。

以上をもちまして。令和7年度の富山国際大学外部評価委員会を閉会とさせていただきたいと思っております。改めまして、本日誠にありがとうございました。

以上